

晴れ着の印象

思いを込めたものの価値

盛岡市立黒石野中学校

三年

小林 晴揮

はるき

澄いようで、それについて目をひく紫色。そして、重なっているのは落ち着いた黄色。まるで布のような本のカバー。本を手に取った時、この色合いに惹かれた。そして、この本を読み終えた後、こう思った。「なぜ紫色の着物と黄色の長襦袢は人々の心に変化をもたらしたのだろうか」と。

この二つの晴れ着の共通点はどちらも「とても美しい」ということと、それを手にした人の心に変化をもたらす」ということだ。色の効力にはそれぞれ特徴がある。紫ならば人の心を落ち着かせ、安定させるといった効力がありそうだ。また、黄色は心を照らすようだ。人を元気づけるような効力がありそうだ。また、奥ゆかしさも感じられ、穏やかに自己を保っているようにも見える。そして、内面からエネルギーを与えてくれそうなくさず

らも感じ取れる。もちろんもひと言で感想を言
えば、美しい。しかし、美しいだけでは人を
魅了することはできても、そんな簡単に人の
人生に転機を訪れさせることはできないので
はないか。つまり、この本に出てくる晴れ着
と長襦袢には、人を魅了するだけでは怒り
ない何かがあった。ただろうと考える。果たして
それはどのようなものだろうか。

この物語の中で、晴れ着たちはいろいろな
人も介して旅をしている。その旅の中で晴れ
着たちは出会った全ての人の心に変化をもた
らしている。その変化をもたらした原因は、
それを贈る人の思いによるものだといふ
ことが分かる。

アネットからチャンドラに晴れ着が贈られ
た時、チャンドラの疲れた心を潤したいとい
うアネットの思いがあった。それまで希望す
ら持てなかったチャンドラは、贈られた晴れ
着をアネットだと思い、生きる希望が芽生え
た。

物の価値というのは、決して値段の高低ではない。物を贈る人の気持ち、受け取る側の気持ちによって、価値が高くなったり低くなったりするのではないだろうか。その物を取り巻く人たちの、それそれを感じやる気持ちが通じた時に、その人たちによって、それがかけがえのない物になるのだらうと思う。

私は服にこだわりがないし、ましてや着物にも関心はない。ただ、着物にまつわる母の話に興味深く思ったことがある。それは、母

が結婚式で着た着物のことだ。母が結婚式に着た着物は、私の曾祖母が嫁ぐ時に、京都で作ってもらった物だという。曾祖母は子孫に引き継ぐために大切にしていたのだらうと思う。なぜならば、それは母方の親せきが嫁ぐ時に着ており、親類の中で二十六人の人が袖を通しているからだ。黒地で松や波、扇なびたくさんのものがその着物に描かれている。母がこの着物をなぜ着たかと聞くと理由が二つあった。一つは、母の家で代々伝わっていた着

物への憧れがあったこと。もう一つは、母の父、つまり私の祖父のためだ。その着物を着て嫁いだ曾祖母は、祖父が二歳の時に亡くなつた。だから、結婚式でこの着物を着て、祖父と一緒に歩くことが、祖父にとって母が生き証になると考えたのだという。

代々伝わるこの着物は、私の母にとってはその着物の代金よりも、もっと価値の高いものなのだ。恐らく祖父にとってのもえうであつただろう。この着物には、きれいな着物への憧れ

父も思う娘の優しさなど、この着物に関する人達の思いがたくさん詰ましている。

思いのこもつた物は、人の心に豊かさや明るさももたらしすのではないだろうか。

これから先、私が誰かに物を贈ることがあるだろう。その時に私はどんな思いを伝えようとするのだろうか。

何だか今から楽しみな気がする。